

# イルゼ アイヒンガーの 『私の住んでいるところ』について

島浦 一博

## 一 はじめに

イルゼ アイヒンガー (Ilse Aichinger 1921-2016) は一九四八年、処女作であり、唯一の長編小説である『もっと大いなる希望』(Die größere Hoffnung) を出版した後、短編小説に集中して取り組んだ。この時に誕生した短編作品はほぼすべて一九五三年に『縛られた男』(Der Gefesselte) という表題でまとめられ、出版と同時に高い評価を受けた。ほぼ同じころ、アイヒンガーは『私の住んでいるところ』(Wo ich wohne) という短編小説を書き上げるが、こちらはあまり世間の注目を浴びなかったようである。しかしこの一九四〇年代から五〇年代にかけてアイヒンガーは創作意欲が高く、様々な小説技法に挑戦している。その一つが、一人称語り形式の小説である。『私の住んでいるところ』は一人称語りの小説で、アイヒンガーのモノローグに対する偏愛の兆しを垣間見ることができる。そして六〇年代以降、アイヒンガーは一人称小説作品を次々に生み出していくことになる。

一九九一年にアイヒンガー全集を編纂するにあたり、この作品を短編集『縛られた男』に収録することにしたのは、

リヒャルトライヒェンスペルガー (Richard Reichensperger) であった。彼はその理由について、この作品が『縛られた男』に収録されている各作品とほぼ同じ時期に書かれていること、そして構成の論理性と精密さが他の初期短編小説の書き方と類似していることを挙げている。<sup>(注1)</sup>この点についてライヒェンスペルガーの指摘に異論はないが、しかし『縛られた男』に収録されている作品の大半が三人称小説であるなか、『私の住んでいるところ』が一人称語りの小説であるということにも少し着目する必要があるように思われる。

ドイツメルヒェンは三人称で語られることが知られている。以前アイヒンガーの短編小説『鏡物語』(Spiegelgeschichte) についての小論で、ドイツメルヒェンの構造とアイヒンガーの作品構造がいかに類似しているかを論じることによって、『鏡物語』の読解を試みた。<sup>(注2)</sup>今回の小論では一人称語りによって物語られるもう一つのアイヒンガーの作品世界を紹介するとともに、その意義についても考察してみたい。

## 二 作品の全訳

### 私の住んでいるところ<sup>(注3)</sup>

私は昨日から一つ下の階に住んでいる。大きな声で言いたくないが、いま私は下の階に住んでいる。大きな声で言

いたくないのは、引越しをしたわけではないからだ。昨夜、いつもの土曜日の夜と同じようにコンサートから帰宅して、階段を上った。その前に門を開け、電気のスイッチを入れて。私は何も知らず、階段を上った。エレベーターは戦争の時から動いていないので。そして四階までたどり着いたとき、私は思った、「この階だったらいいのに」と。そしてちよつとだけエレベーターの扉の横の壁に寄りかかった。いつも四階まで上ったところで疲労感のようなものに襲われる。あんまり疲労して、もう五階まで上ったんじゃないかと思うこともある。でもその時はそんなふうには思わなかった。自分の部屋はもう一階上だと分かっていた。私は最後の階段を上ろうと、再び目を開けた。でもそのとき、エレベーターの左横の玄関ドアに私の表札がかかっているのが目に飛び込んできたのだ。やっぱり思い違いをしている、もう階段を五階まで上っていたのだろうか。私は階数の表示板を見ようとしたが、ちょうどそのとき電気が消えてしまった。

電気のスイッチは廊下の奥にあるので、私は二歩先の我が家のドアまで暗がりの中を歩いていき、鍵を開けた。我が家のドア？ 私の表札がかかっていたのなら、これが我が家のドアでなくて、誰のドアだというのだろうか。やはりもう階段を五階まで上っていたのだ。

実際、ドアは抵抗もなくすぐに関き、スイッチも見つかつて、そして私は明るくなった玄関ホールに、我が家の玄関ホールに立っていた。つまり、何もかもいつもと同じだったのだ。ずっと前から張り替えたと思っていた赤い壁紙も、その壁際に置かれたベンチも、左手のキッチンへ続く廊下も、何もかもいつもと同じだった。キッチンには夕食の残りのパンがまだパン容器の中に入っていた。何ひとつ変わってはいない。私はパンを一切れ切って食べ始めたが、でもふと、さっき玄関ドアを閉めなかったことを思い出して、閉めに戻った。

そのとき、玄関ホールの明かりが外廊下に漏れていて、階数の表示板が見えた。四階、そう書いてあった。私は外へ飛び出して電気をつけ、もう一度読んだ。それから我が家以外の玄関ドアにかかっている表札も読んで回った。どれもこれまで私の下の階に住んでいた人たちの名前だった。そうすると、私は階段を上って自分の目で確かめてみたくなった。これまで私の隣に住んでいた人たちの隣にはいま誰が住んでいるのか、これまで私の真下に住んでいた医者はいま本当に私の真上に住んでいるのか。でも急に弱気になって、私はついベッドに入ってしまった。

それから横になっても目が冴えて、明日はどうなるのだろうとあれこれ考えている。やっぱりときどき、ベッドから出て上へ行って確かめたいという気持ちに駆られる。でも弱気になりすぎているし、それに廊下の明かりに起き出してきた上の階の住人が、「ここで何をしていますか」と訊いてくるかもしれない。以前隣人だった人にそんな質問をされるくらいなら、このまま横になっているほうがいい。昼間に上に行く方がよっぽど大変なのは分かっているけれど。

隣から、我が家に住んでいる学生の寝息が聞こえてくる。彼は造船を勉強している学生で、規則正しく深い寝息を立てている。彼は何が起きたか知らないのだ。彼は知らない、でも私はここに横になって目が冴えている。夜が明けたら彼に訊いてみようかと私は自分に問う。彼はほとんど外出しないから、私がコンサートに行っている間も、おそらく部屋にいただろう。だったら知っているはずなのだけれど。掃除のおばさんにも訊いてみようか。

いや、それはやめておこう。訊いてもこない人に、どうして訊く必要があるだろうか。訊いてもこない人に近づいていって、「昨日まで私が一つ上の階に住んでいたかどうか、もしかしてご存知でしょうか」などと、どうして訊く必要があるだろうか。そんな質問をされて、訊かれた人はなんて答えたらいい？ 誰かが私に訊いてくれるという希望

だって、夜が明けて、「すみませんが、あなた、昨日まで一つ上の階に住んでいませんでしたか」と誰かが私に訊いてくれるという希望だって、まだ残っているのだ。けれど私の知る限り、掃除のおばさんは訊かないだろう。それとも元お隣さんなら、「あなた、昨日までうちの隣にお住まいじゃありませんでしたか」と訊いてくれるかもしれない。それとも今の新しいお隣さんなら。けれど私の知る限り、彼らはみな訊かないだろう。そうすると私にできるのは、これまでもずっと一つ下の階に住んでいたかのように振る舞うことだけだ。

私は自分に問う。もしコンサートに行くのをやめていたらどうなっていたらだろうと。でもこの問いも、今日からは他のあらゆる問いと同じように、無用なものになるのだ。さあ、もう寝よう。

私はいま地下倉に住んでいる。ここにいと、掃除のおばさんが石炭を取りにわざわざ下まで行く必要がないというメリットがある。石炭は私たちの隣に置いてあるので、おばさんもこれにはすごく満足しているみたいだ。こちらの方が楽だから、それでおばさんは訊かないのではないかと私は疑っている。掃除にしたって、これまで一度だってきちんとしたことがない人なのだ。ここならなおさらだ。家具に付いた石炭の粉を一時間おきにはたくよう、彼女に頼むのもおかしいし。おばさんは満足している、それは見ていればわかる。それに学生は毎日口笛を吹きながら地下倉の階段を上っていき、夕方になるとまた帰ってくる。夜になると、彼の規則正しい深い寝息が聞こえてくる。彼がそのうち女の子でも連れてきて、その子が彼の地下倉住まいを変だと思ってくれたらいいのと思うけれど、彼は女の子ひとり連れて来ない。

しかも、ほかの人たちも私に訊いてこない。地下倉の右や左にガラガラと大きな音を立てて荷を下ろしに来る石炭屋の男たちは、階段で会つと帽子をとって挨拶してくる。私が通り過ぎるまで、大きな石炭袋を下に置いてじっとしていてくれることもよくある。管理人さんも私が門を出ようとするとそのを見かけると、好意的に挨拶してくれる。初めは一瞬、前より好意的に挨拶してくれるようになったと思つたけど、それはつねばれだった。地下倉から上がつてくれば誰だって、いろいろなこと好意的になったように思えるのだ。

通りに出ると私はひとまず立ち止まり、コートに付いた石炭の粉を払う。少しはへばりついて残つてしまふけれど、でも私のコートは冬用で、色が黒っぽいのだ。路面電車に乗って、車掌が私をほかの乗客と同じように扱ったり、ほかの乗客も私をよけなかつたりすると、私は驚いてしまふ。じゃあ下水溝に住むことになったらどうなるだろう、と私は自分に問う。というのも、私にはこう考えることがだんだん普通になってきているのだ。

私は地下倉に住むようになってから、日が落ちるとまたコンサートに行くようになった。土曜日はたいてい行くけれど、平日もときどき行くようになった。結局のところ、出かけていなくても、ある日突然地下倉に移ることは防げなかつたのだ。自分に非があると考えるなんて、下へと降り始めたことにすべてが関連していると考えなんて、今はおかしいと思つたりもする。初めのころ、私はいつも思つていた、「コンサートになんか行かなければ、飲みになんか出かかなければ!」と。そんなこと、今はもう思わない。地下倉に来てから、私は心がとても穏やかになつたし、一杯飲みたいと思えばすぐに出かける。下水溝のガスを怖がっても意味がない。下水溝のガスを怖がるなら、地球内部の火も同じように怖がらなくなつてなくなる。そんなことを言えば、いろんなものを怖がらなくてはいけなくなる。それにたとえ私がずっと家にいて、一歩も表に出なかつたとしても、ある日突然私は下水溝に身を移すこと

になるだろう。

ただ、掃除のおばさんはこのことについてどう言うだろうか、私は自分に問う。そうなれば、少なくともおばさんはこの換気からも解放される。それに学生は、口笛を吹きながらマンホールを上って、また下りてくるだろう。じゃあ下水溝になることになったら、コンサートは、一杯飲みに行くのはどうなるのだろうか、と私は自分に問う。もしそのときに学生が女の子を連れて来ようと思いついたら？ 下水溝でも私の部屋は同じなのだろうか、私は自分に問う。これまではそうだったが、下水溝となると、家ではなくなってしまうのだ。地面の下を部屋とキッチンと客間と学生に部屋に分けるなんて、私は想像もつかない。

けれど、これまで何ひとつ変わらなかったのだ。赤い壁紙も、その手前のチェストも、キッチンにつづく廊下も、壁のすべての絵も、古びた革張りのアームチェアと本棚も　本棚にはすべての本が揃っている。向こうのパン容器と窓辺のカーテンも。

もっとも窓は、窓だけはすっかり変わってしまった。けどもともと私はこの時間帯はたいていキッチンで過ごしていたし、キッチンの窓は以前から外廊下に面していた。そして窓にはずっと格子がはまっていた。だから管理人さんの所に行くほどの理由はない。まして窓からの眺めが変わったぐらいでは。眺めは住まいの一部ではありませんし、家賃は部屋の広さで決まるのであって、眺めではありませんから、と当然管理人さんは言うだろう。窓からの眺めをどうとるかはおなた次第です、彼ならそう言いかねない。

だから私は管理人さんに会いには行かない。彼が好意的である限り、私は楽しい気分であられるのだから。私が異を唱えるとしたら、ただ一つ、窓の大きさが半分になった気がするということぐらいだろうか。でもそうしたら管理

人さんは、地下なんだからどうしようもないんです、と反論するだろう。そんなふうに言われると、私は返す言葉がない。私だって、この状況に慣れたわけじゃない。だって少し前まで、私は五階に住んでいたのだから。こんなことなら、四階に移った時点で苦情を言っておけばよかった。今となっては手遅れだけれど。

### 三 作品の紹介

さて、この作品を紹介するにあたって、まず形式的なことについて簡単に述べておきたい。この物語を語るのは主人公の「私」である。しかしこの「私」が男性なのか女性なのか、名前は何というのかも含めて、「私」についての詳しい情報は明らかにされない。

またこの物語は、途中行間をあげることによって前半と後半に分けられている。「私」が語っている場所は、前半部分はベッドの中であり、後半部分はキッチンだと推測されるが、そこで自分の心に浮かんできた思いを自由に日記帳につけるように綴っているような印象を受ける。つまり、「私」は特定の誰かに向かって語っているというより、誰に語るともなく語っているのである。この語りが日記の叙述スタイルを想起させることについて、ライナー ケネッケ (Rainer Könecke) は「そのスタイルは、日常語で統一されており、一見したところ、作家的な印象をまったく与えない。自発的に、見分けられうる距離なしに、思考があっさりと言葉にされるのである」<sup>(注4)</sup>と述べている。この物語には主人公である「私」以外にも、「私」の家に間借りをしている(と思われる)大学生、家の掃除をする女性、管理人、石炭屋の男たちなどが登場するが、「私」がこれらの人たちと直接会話を交わすことはない。これらの人物



たちは主人公「私」の目を通して描かれるだけである。しかも「私」自身さえ直接言葉を発さないので、語られる内容もはたして本当に現実の出来事であるのか、判然としないままである。

次に、この物語のあらすじについて手短かに述べておきたい。「私」による語りが途中行間をあけることによって前半と後半の二つに分けられていることはすでに述べた通りだが、前半では「私」がある夜コンサートから帰宅し、階段を上って自宅アパートに戻ってくる。すると、アパートの五階にあつたはずの自分の家がいっつの間にか四階に移動していることを発見する。五階に住んでいた住民がそっくり四階に移動したのではなく、「私」の家だけが、真下に住んでいた医者の家と入れ替わっているようなのだ。「私」はその事実を自分の目で確かめようと、上の階に行くうとするが、突然気弱になってベッドに潜り込んでしまふ。そして横たわったベッドの中で事の次第を語る（日記に綴る）のである。

後半部分で あけられた行間により、どれくらいかはわからないが時間が経過したことが示唆される。主人公の「私」は地下倉暮らしについて語る。五階から四階、さらに下への移動があり、いまや地下倉で生活をしながら、さらに下の下水溝で遠からず暮らすことになるだろうという考えを自然と受け入れるようになっていく。以上がこの物語の概略である。

この物語のテーマは「墮ちていく」ということである。それは主人公がアパートの五階から四階へ、そして地下倉へと墮ち、ついにはその下の下水溝への落下を予感するという形で表されている。アイヒンガーは物語からできる限りのものを削り取って、この墮ちていくというモチーフを際立たせている。

では「墮ちていく」とは何を意味しているのだろうか。社会的に「墮ちる」といえば、負のイメージである。この

物語に即して言えば、定期的にコンサートに通うような中産階級に所属している主人公が、社会の底辺で働く貧しい人々の中へと落ちていく様子を想像させる。人はふつう日々の生活の中で何か問題が発生すると、様々な行動をとることによって安定を保とうとする。ところがこの主人公からはそのような意識はあまり感じられない。しかし主人公は端から行動することをあきらめているわけではない。行動しようとはするけれど、その都度さまざまな言い訳をして行動を躊躇し、ついには行き詰ってしまう。

ライナー ケネツケは、この作品にはナチスの支配体制に同調した当時の多くの人々に共通する心情が描かれていると解釈している。主人公を通じて声を上げるべき時に上げなかった人々の後悔の念を描くことによって、当時の中産階級の心情を批判しているといっているのである。<sup>注5)</sup>「落ちていく」つまり、自分の生活が悪化していくことに目をつぶってやりすごした結果、引き返せない所へとおいかまれてしまった当時の経験から、アイヒンガーは警鐘を鳴らしているというケネツケの解釈は説得力がある。アイヒンガーは四七年グループの朗読会に招待されてさまざまな作品を朗読しているが、この反体制を標榜する四七年グループに参加していることをかんがみれば、この作品に反体制的な、既存の秩序に対する批判的な雰囲気<sup>注6)</sup>が漂うのも理解できるだろう。

しかしながら、また別の解釈も可能であるように思われる。というのも、ケネツケの解釈は「落ちていく」ことについて一つの筋の通った解釈であるが、この解釈ではなぜ「私の住んでいるところ」を作品の表題に据えたのが、今一つはつきりしないからである。この表題は何を意味しているのだろうか。次の章でそのタイトルに即した解釈を考えてみたい。

#### 四 「私の住んでいるところ」とは

この小説は一人称語りで書かれている。アイヒンガーの小説は、一人称で書かれたものであれ、三人称で書かれたものであれ、その構成の論理性や緻密さは共通しており、緊張感に満ちた密度の濃い作品となっている。ただし、以前の小説でも述べた通り、アイヒンガーの三人称小説はメルヒエン的要素が強く出る傾向にあり、その作品は誰かに話して聞かせるために書かれたものとなる。そのためさまざまな制約の中でのコントロールが余儀なくされ、その自由度は低くなってしまう。もちろんアイヒンガーにかかれば三人称小説においても登場人物の心情は十分に描き出されるのであるが、それでも一人称語り小説と比較すれば、思いのたけを述べる自由度には大きな差があると言える。よって、アイヒンガーの一人称語り小説では、語り手である「私」の「核となるもの」、言い換えれば、普段は決して語ることのない、その人だけの秘密のようなものが語られていく。その際の形式としては日記形式あるいは独白（モノローグ）などが適しているのは言うまでもない。それらであれば、誰かに向けて語られるものではないので、その内容には一切の制約がない。そのせいか、アイヒンガーの一人称語り小説を読む者は、あたかも他人の秘密をこっそりのぞき見たような気持ちになるのである。

ナチス支配下のウィーンをユダヤ人の母親を匿いながら生き抜いてきたアイヒンガーにとって、「墮ちていく」というテーマは非日常的なテーマではなかった。日々の生活が突然破壊され、奈落の底に突き落とされるような体験も一度や二度ではなかっただろう。信じるに足るものが社会のどこにも見出せなくなるとき、それでも生き延びようとすれば、その人の生を支える「核となるもの」が必要となるのではないだろうか。その「核となるもの」、それは

いついかなる時でも誰にも奪い取られることのない、自分だけのものではなくてはならない。アイヒンガーがその「核となるもの」について語るとき、その小説は一人称語りの形をとりはじめ。「私の住んでいるところ」とは、まさにいついかなる時でも誰も奪うことのできない、自分だけの場所なのである。

そこでは人は何も思い煩うことなく、自分の思いを自由に日記に綴ったり、あるいは誰に語るともなく自分の思いを口に出したりすることができる。それが核となつて自分を護ってくれる場所となるのである。そういう意味でこのタイトルが付けられたのではないだろうか。

## 五 おわりに

以前に論じた短編小説はいずれも三人称で書かれた小説であつたが、今回の小論では一人称語りによつて物語られる『私の住んでいるところ』を題材に取り上げ、作品の紹介を行うとともに、この作品が一人称語りで書かれていることの意義について考察を行った。アイヒンガーの一人称語り小説では、普段は決して語ることのない、その人だけの秘密のようなものが語られるということについてはある程度論じることができたが、その意義についてはまだ十分な考察ができたと言ひ難い。この点については今後の課題としたい。

## 注

- (1) Reichensperger, Richard: Editorische Nachbemerkung in: Der Gefesselte Erzählungen I (Fischer) 1991, S. 111-112.
- (2) 島浦一博「イルゼ アイヒンガーとドイツメルヒェン」九州国際大学「教養研究」第三卷第三号 二〇一七年、一七頁。
- (3) Aichinger, Ilse: Wo ich wohne In: Der Gefesselte Erzählungen I (Fischer) 1991, S. 93-98
- (4) ライナー・ケネツケ(竹岡健一訳):『ドイツ短編』1945 1968年 12の作品と解釈(同学社)二〇〇八年、五四頁。
- (5) ライナー・ケネツケ(竹岡健一訳):『前掲書』六二丁六三頁。
- (6) ハンス・ヴェルナー・リヒター他(神崎巖・中野京子編訳):『廃墟から 四七年グループ短篇集』(早稲田大学出版部)一九九三年、三〇三丁三二二頁。